

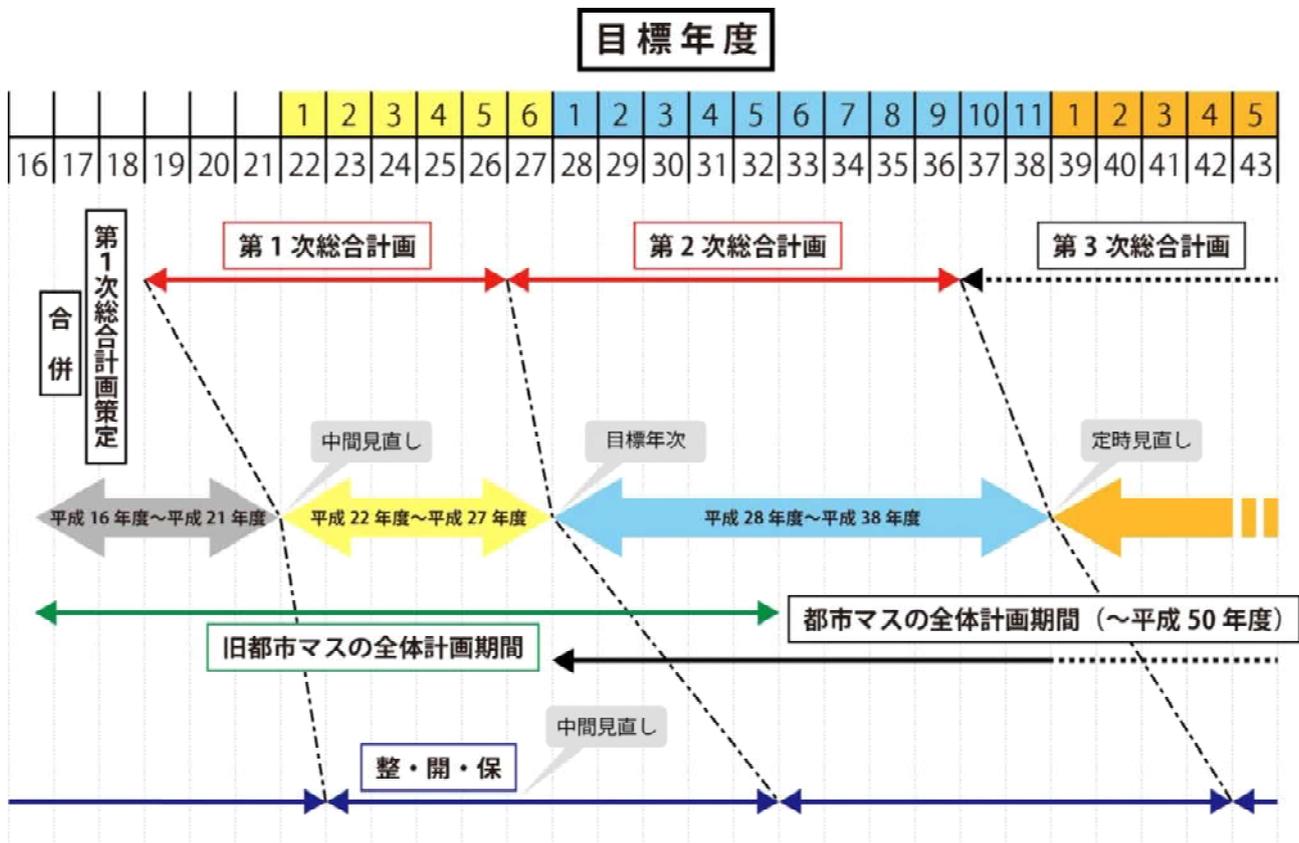
第 **4** 章

街（まち）の将来像

1. 将来の人口・土地利用フレーム

目標年次

『遠軽町都市計画マスタープラン』の目標年度は、上位計画である「第2次遠軽町総合計画」の目標年次が平成36（2024）年度であるため、総合計画の変更状況を踏まえ平成38（2026）年度とする。



将来人口フレーム

遠軽町の将来人口は、地方分権の進行により広域行政が浸透し、この地方の中心都市として堅実な進展をするものとし、「第2次遠軽町総合計画」と整合した目標人口18,000人とする。

将来土地利用フレーム

（仮称）遠軽豊里インターチェンジの供用による土地利用の変化、現行用途地域内にある低未利用地の適切な開発、市街地の準工業地域における宅地開発の状況等を踏まえ、用途地域の変更や白地への対応を行う。

街（まち）を構成する地区

「遠軽町街（まち）づくり構想」では、遠軽町の都市計画区域を次に示す4つの地区で構成する。

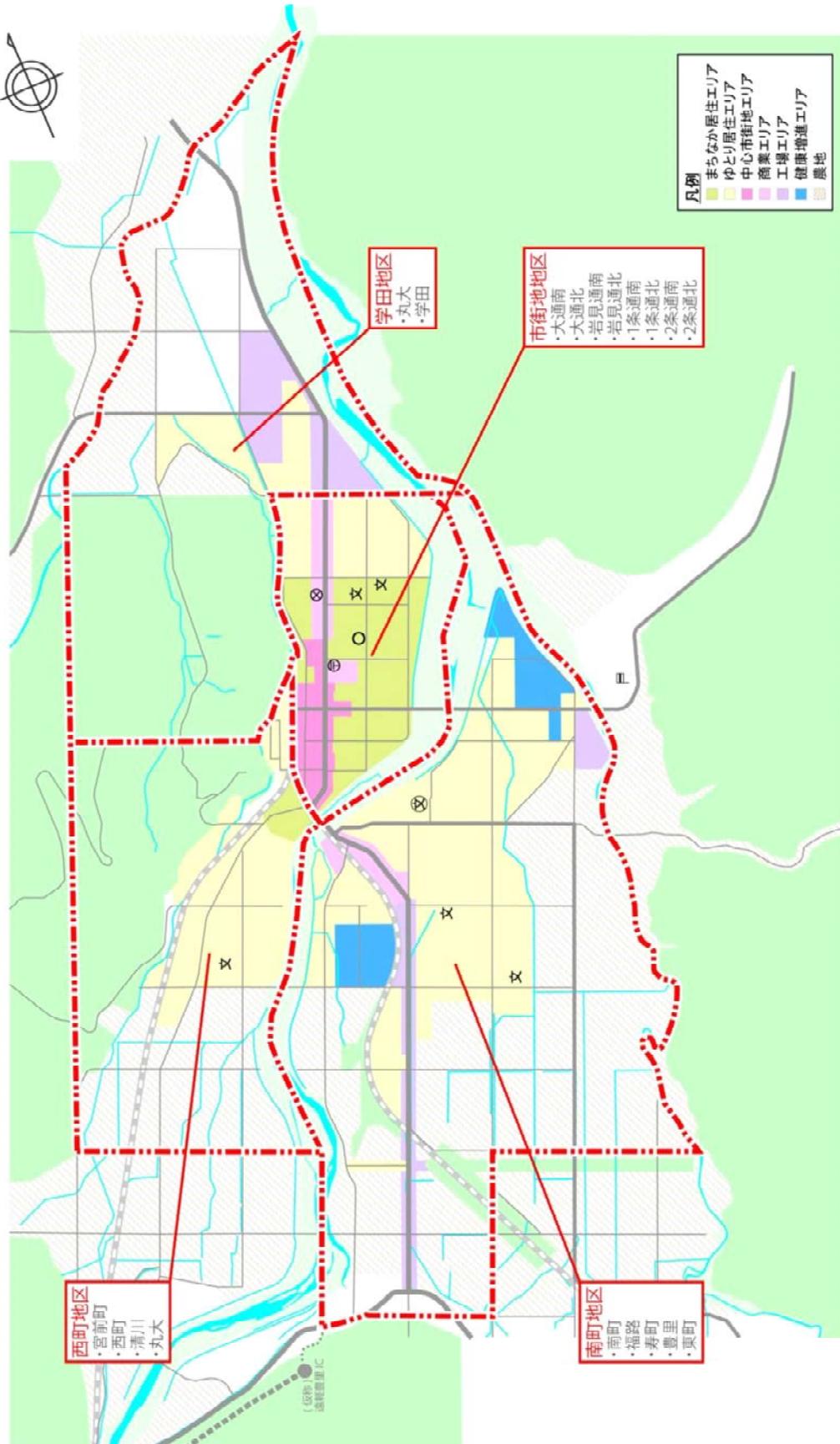


図 4.1 街（まち）を構成する地区

2. 街（まち）の将来都市構造

街（まち）の将来の都市構造は、遠軽町が中心となり施設整備を積極的に行う箇所である6つの拠点、望ましい街（まち）を形成するために遠軽町が指定した3つのゾーン、そして街（まち）の骨格となる2つの交流軸、2つの広域連絡軸、3つの「ふるさと軸」と市街地環状によって構成し、将来にわたってまちづくりの基本的な枠組みとして位置づける。

街（まち）を構成する拠点とゾーン【図 4.2】

● 中心交流拠点（JR 遠軽駅・バスターミナル周辺地区）

- ・ 南北・東西交流軸の交差するところ及び JR 遠軽駅・バスターミナル周辺地区は、まちのみならず広域の拠点的な交流の場であり、交通の要衝として栄えてきた歴史ある街（まち）の顔として、また、広域道路交通の要衝として、さらなる都市機能の充実と街並み整備を図る拠点として位置づける。
- ・ この拠点の部分を構成する JR 遠軽駅周辺は、沿道商業サービスゾーンとの連携を視野に入れつつ、乗り継ぎ利便性の強化、歩道や駅施設等のバリアフリー対策、土地利用の高度化と都市機能強化を進める重点地区として位置づける。
- ・ もう一つの部分を構成する岩見通商店街・ゆうあい通・大通商店街は、街（まち）の古くから親しまれた商店街・飲食街として活力・にぎわいを維持していくため、今後も引き続き商業・サービス機能の強化、歩行系ネットワークの充実、街並みの整備を進める重点地区として位置づける。

● 行政・福祉拠点（遠軽町役場周辺地区）

- ・ 遠軽町役場を中心とした一帯は、まち及び道・国等各種行政施設、文教施設、病院等が集積している。この一帯は、今後の広域連携対応の機能集積も含め、引き続き町域・広域の行政拠点として位置づけ、利用しやすい環境整備を進める。
- ・ また、げんき 21 周辺は高齢者向け福祉施設が集積した優しさと利便性の高いエリアであり、福祉拠点として位置づけ、さらに歩行系ネットワークの充実やコミュニティサービスの集積を図っていく。

● 観光・レクリエーション拠点（太陽の丘えんがる公園、見晴牧場）

- ・ 太陽の丘えんがる公園及び見晴牧場は、遠軽町民のみならず、オホーツク地域全体の広域的な観光・レクリエーション拠点として、さらなる魅力アップと交流人口誘致に取り組んでいく。

● スキー等・交流拠点（ロックバレースキー場、道の駅（予定））

- ・ ロックバレースキー場及び建設が予定されている道の駅を集客・交流の施設として整備を行う。

● 2つのスポーツ拠点（えんがるスポーツ公園・湧別川河川緑地、えんがる温水プール周辺）

- ・ えんがるスポーツ公園及び湧別川河川緑地における野球場・武道館・テニスコート・パークゴルフ場・サッカー場等の整備に加え、水辺の整備を進め、競技・スポーツ振興の場として機能を充実させる。
- ・ えんがる温水プール、建設が進んでいるサッカー・ラグビーグラウンド等のスポーツ施設を合宿や大会等でも使用し、スポーツ交流人口の促進を図ると共に、健康・交流の場として維持し、湧別川河川緑地と併用可能な施設とする。

● 街（まち）の顔ゾーン

- ・ 旭川・北見方面から街（まち）に入ると木楽館あたりから「街」のイメージが高まっていき、遠軽橋を渡り、清流湧別川の流れが左右に開けるときにイメージはピークを迎え、街（まち）のシンボル『瞰望岩』と背後の丘陵地が見えてくる。そして、丘の上に楽しく美しく大きな『太陽の丘えんがる公園』があることを知る。『瞰望岩』を通り過ぎると、さらににぎわいの雰囲気が高まり、JR 遠軽駅が見えたとき、街（まち）の中心に来たことを実感する。
- ・ こうした鉄道や車の車窓から見る景色の移り変わりが、古くから街（まち）へ至る人々の印象であったと想像され、この視覚体験の中に街（まち）のイメージが凝縮される。
- ・ このように、木楽館から太陽の丘えんがる公園、JR 遠軽駅にかけての三角形のゾーンには、街（まち）のシンボルとなる建物や風景がたくさんある。このゾーンにある景観要素は重点的に保存、演出、そして連携づくりに取り組み、大切な街（まち）のイメージ・交流資源として次代に引き継いでいく。

● 沿道商業サービスゾーン

- ・ 国道 242 号の市街地地区及び停車場通沿線、遠軽橋南側は沿道商業サービスゾーンとして位置づけ、沿道立地型店舗の都市空間を形成し、周辺住環境との調和に留意したまちづくりを進める。

● 沿道サービスゾーン

- ・ 国道 242 号の南町地区及び学田地区、鴻之舞通沿線、岩見通北部沿線は沿道サービスゾーンとして位置づけ、企業立地動向と土地利用の調和を見極めながら、新たな物流企業の誘致を図る。

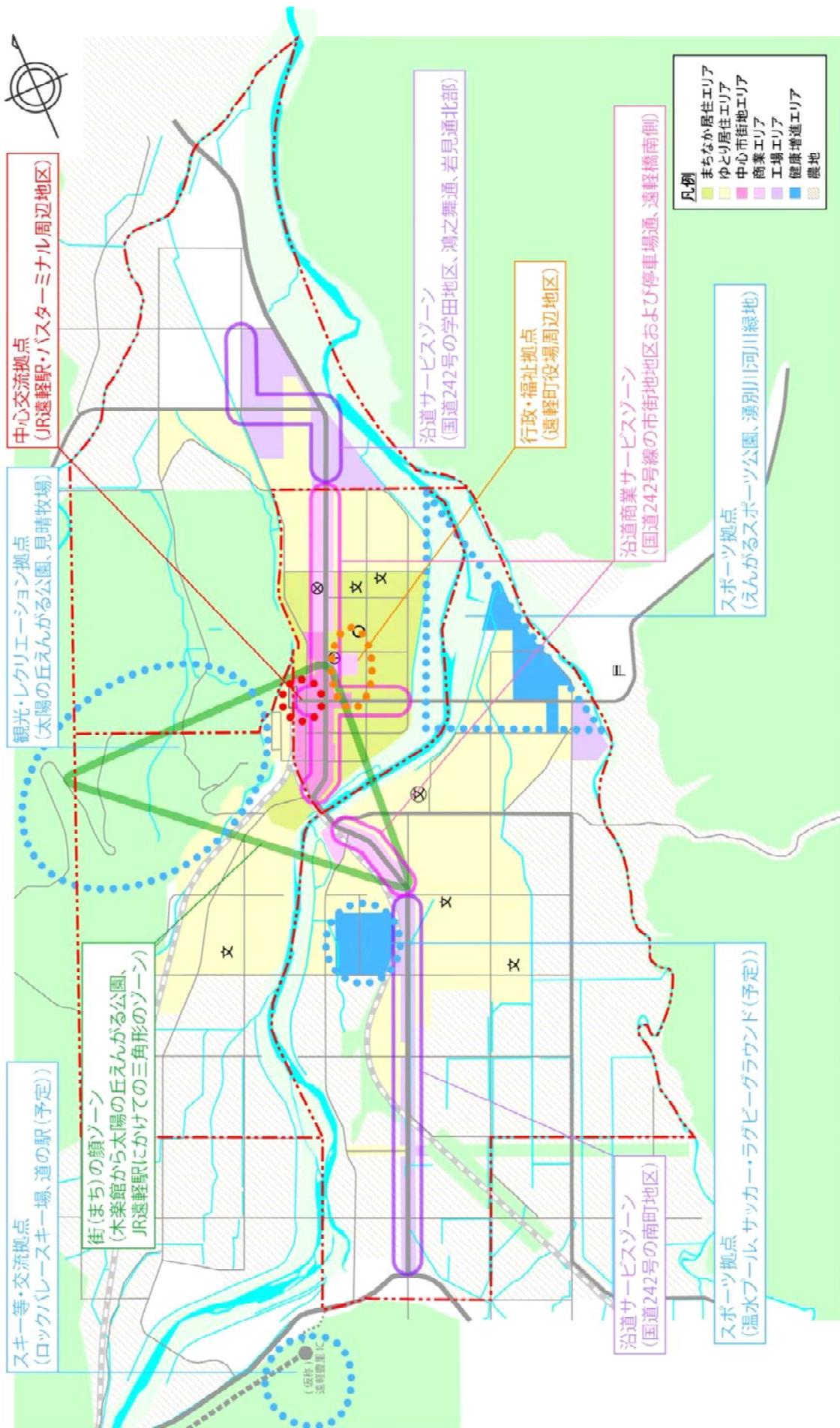


図 4.2 街（まち）を構成する拠点とゾーン

街（まち）の骨格をつくる軸【図 4.3】

● 2つの交流軸（南北交流軸、東西交流軸）

- ・ 街（まち）を南北に貫く大通（国道 242 号）は南北交流軸とし、街（まち）の人や物の交流を支え、都市イメージの中心となる骨格的な軸として位置づけ、街並み整備を図っていく。
- ・ JR 遠軽駅から湧別川を渡り東町・向遠軽へ抜ける停車場通（道道遠軽停車場線・道道遠軽芭露線）は東西交流軸とし、街（まち）の交通と発展のシンボルである JR 遠軽駅、湧別川を望む美しいシンボル軸として引き続き街並み整備を図っていく。

● 2つの広域連絡軸（道道遠軽安国線、道道遠軽雄武線）

- ・ 道道遠軽雄武線、道道遠軽安国線は、街（まち）と他の地区をつなぐ主要な道路として位置づける。

● 3つの「ふるさと軸（野上通、南ヶ丘通、岩見通）」と市街地環状（2条通、岩見通）

- ・ 野上通（西町地区）、南ヶ丘通（南町地区）、岩見通（学田地区）を各地区の「ふるさと軸」、2条通、岩見通（市街地地区）を市街地環状として位置づけ、各地区から中心市街地へのアクセスの利便性を高めるとともに、歩行環境の向上、コミュニティのシンボルとしての街並みを保持する。

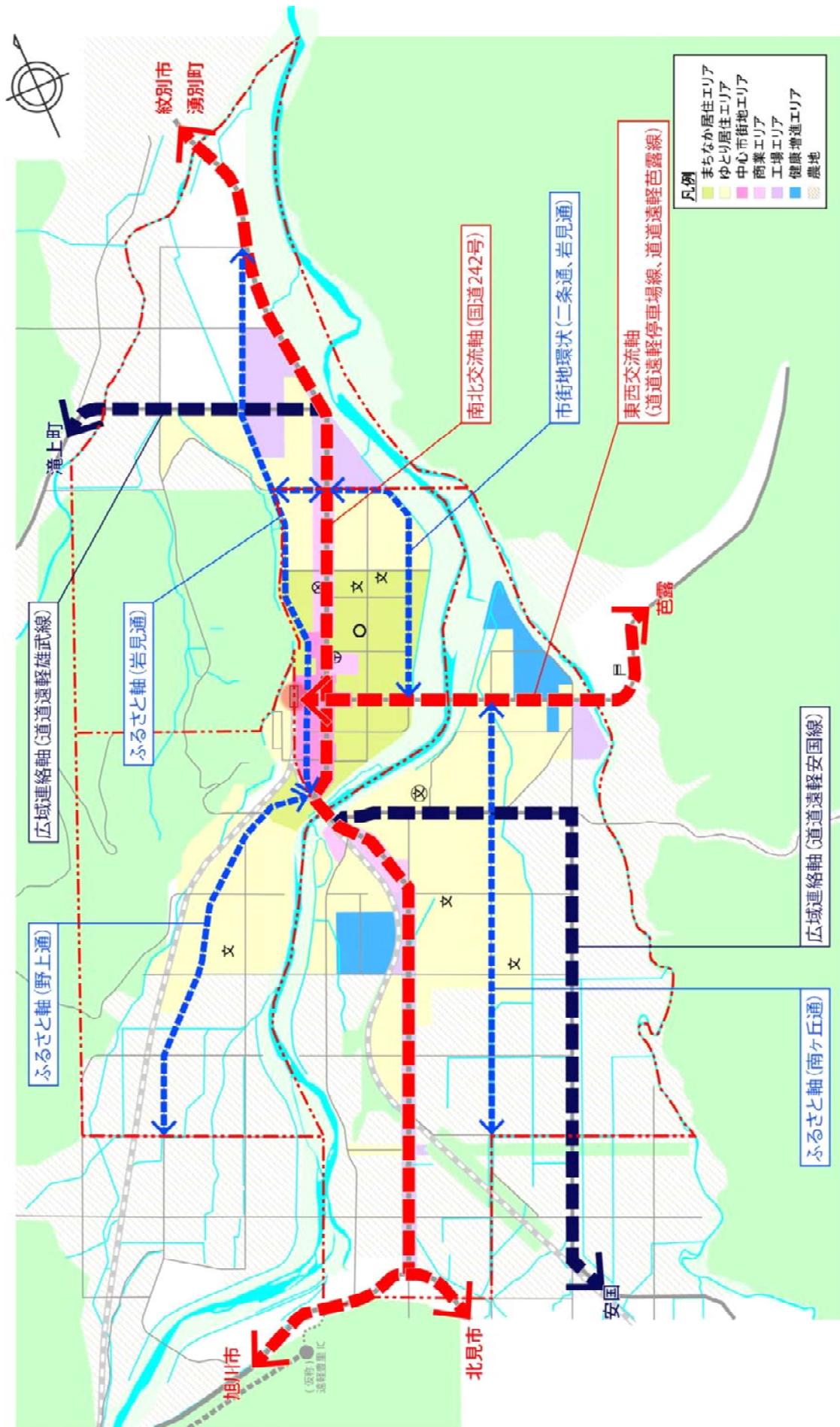


図 4.3 街（まち）の骨格をつくる軸

